

はじめに

ナーシング・グラフィカ母性看護学の初版から15年以上が経過しました。2019年には本書を大幅改訂し、中心テーマを「いのちの創造」の看護学として、母性看護学①『概論・リプロダクティブヘルスと看護』、②『母性看護の実践』、③『母性看護技術』の3冊の構成といたしました。

2019年の改訂からこの第3版改訂までの間に、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが発生しました。母性看護の場である産科でも、コロナ禍前には当たり前であった、人と人との触れ合いが制限されました。例えば、家族で出産施設へ出向いての妊婦健康診査（妊婦健診）、母親・両親学級での他の妊産婦との交流、家族が立ち会う中での出産、生まれたばかりのわが子を家族が抱っこする、などです。新しい家族を迎え入れて、パートナー（夫）とともに踏み出す子育ての第一歩、そして、それを支える看護が大きく変わったと言えるでしょう。

そのような中で進めてきた今回の改訂では、母性看護の実践の基本と考える【親になることを支える看護】をテーマに編纂しました。育児の中で父親も母親と同程度メンタルヘルスの不調を感じていることが明らかとなっています。そこで、産褥期の看護には「親になることへの看護」として、父親になる過程とアセスメントを加えました。ほかにも妊産褥婦に対するメンタルヘルスケアへの理解を深めるため、精神疾患合併妊娠や母乳育児中の母親へのメンタルサポートを追加しました。また妊婦への看護として、セルフケアが重要とされる、マイナートラブルへの具体的なアプローチ方法を充実させました。

また今回の改訂は、看護基礎教育カリキュラム第5次改正のタイミングでもあります。超少子高齢社会の中、地域包括ケアシステムの推進と妊娠期から育児期までにわたる切れ目のない支援の充実のため、多職種が連携・協働し医療・保健・福祉を提供することが推進されています。第11章を「周産期医療システム、災害時の支援」とすることで、各期の学習後により包括的なケアを学べる流れといたしました。

ナーシング・グラフィカ母性看護学3冊は、母性看護に必要な基本的知識を体系的・視覚的に学ぶことができるよう構成しています。保健指導能力や臨床判断能力は③『母性看護技術』と、実習で求められる倫理的判断は①『概論・リプロダクティブヘルスと看護』と連動させて、学びを深めて下さい。

学ぶことはひとを成長させてくれます。妊産褥婦と新生児に対する看護師の価値観や、看護の果たす役割を考えるテキストになれば幸いです。

最後に、執筆の諸先生方、編集部の皆さまのお力添えのたまもので本書が出版されることに感謝申し上げます。

小林 康江